

●ナンキンハゼの実が届く 12 月 18 日 京田辺市緑花協会から

里山の会では子どもたちの工作として京田辺市の木とされているナンキンハゼの実を利用した取り組みとして、松かさ拾って世界に一つしかないツリーを考案してきました。台座や柱、松傘、そしてナンキンハゼの実を着色してピンセットで張り付ける作業を楽しんでもらっています。当初はナンキンハゼの実は容易に沢山収集できていましたが、近ごろは落葉の清掃が問題になってナンキンハゼの実が少なくなって困難をきたすようになり、昨年から週刊ニュースで実の提供を呼び掛けなければならなくなりました。今年も街路や公園を管理されている京田辺市都市緑花協会にお願いいたしましたところ、収集にご協力をいただき沢山くださいました。大変ありがたいです。



●吉村開君 里山農園題材に「わたしの自然観察路コンクール」で優秀賞を受賞 12 月 18 日に賞状が届く

やましろ里山の会の昆虫観察会に顔を見せたのは 2024 年の中学 2 年生の時でした。夏に桜谷先生から里山農園の素晴らしさのお話を受けて、普賢寺水取まで自転車で調査に出かけることになり、今年の夏には金田さんから標本制作の指導を受けるなどを通じて里山農園での調査観察を継続してきました。この秋、このコンクールの応募を担任の先生から紹介されて作品を提出し、見事に優秀賞を受賞となりました。里山の会始まって以来のことで素晴らしい成果です。応募した折の説明文を紹介します。

僕の街の里山道 ～僕が観た宝ものの蝶～

僕の街の里山は京都府南部のとある市にあります。とても自然豊かな場所です。水田、畑、草地、雑木林等の様々な環境があります。様々な環境があるということは多種多様な生き物たちが暮らしています。

ここでは里山がどういう場所なのかを紹介したいと思います。

里山は戦前までは日本全国至る所がありました。燃料(木炭、薪)を採ったり、牛や馬などに食べさせる草などを刈り取ってくるなどしていました。しかし戦後、高度経済成長の時代に石油、トラクター、化学肥料などが次々に日本に入ってきました。燃料、肥料、牛馬が必要ではなくなり、里山環境は次々と荒れた環境へと変化していきました。

里山は現在では人間に必要な環境となってしまいましたが、生物多様性を守っていくためには必要な環境なのです。

1 は 草刈りの頻度が少ないポイントです。水はけが悪いです。

カナムグラやアザミなどの蝶が寄ってくる植物がたくさん生えています。

草刈りの頻度が低いことにより、草が生い茂るために、影ができ、冬に北風が直接当たらないので越冬昆虫たちの絶好の越冬場所になるというわけです。

草刈りの頻度を少なくすることでも保たれる環境があるのだと実感しました。

2 は ユズが生えており様々なアゲハチョウ科の蝶が食草としています。

主にナミアゲハ、モンキアゲハ、ナガサキアゲハ等が利用しています。

ユズが生えている横の道はアゲハチョウ科のオスが(蝶のオスがメスを捜したり、吸蜜するための花が豊富にある縄張りのような道として)利用しています。道の草や不要な木を里山の管理する人たちが管理することで保たれているのだと思いました。

3は もともと水田だった場所なので、水はけが悪く常に地面がドロドロしている湿地環境です。梅雨明けなどは歩くのが大変です。

樹種はヤナギ類が大半を占めています。ヤナギからは樹液が出ており、樹液には様々な蝶、昆虫が集まります。

ヤナギの葉はコムラサキが食草としています。水田がなくなった後はまた新しい生態系が生れることを知りました。

4は 定期的に草刈りが行われている草地です。草地にはアザミ、ヒメジョオン等の蜜源植物が豊富に生えています。

定期的に草刈りがされることにより明るい場所を好む植物が生えるためその植物を食草とする蝶が多いです。昔は肥料や牧草を刈り取るため草原、草地が各地に沢山あったと考えられます。草地を好む蝶は近年激変しています。草地を定期的に管理していく必要があります。

5は 里山を管理してくださっている方々が作業するために車で走行したりするために使う道です。車などが通ることで道路が押し固められ、水はけが悪くなります。水はけが悪くなると水たまりができ、そこにキタキチョウやアカタテハ、ウラギンシジミ、コムスジ等のオスが給水するために飛来します。農道も蝶にとっては大切な環境であり、里山は人間が利用することで成り立っているのだと実感しました。

6は 一年中蝶が豊富に生息する環境ではないのですが、秋にフジバカマという様々なチョウが給蜜に飛来する花があるので紹介したいポイントとして挙げました。

ここの里山ではフジバカマの原種を育てており、10月ころには満開になります。

様々な蝶が吸蜜しにきます。有名なのはアサギマダラです。④他にもアゲハチョウ科タテハチョウ科などが吸蜜しに飛来します。

7は 乾燥しています。しかし乾燥しているので大きな木や背の高い草が生えづらい環境ともいえます。風が直接当たる場所なので植物は足首程度のものしか生えていません。

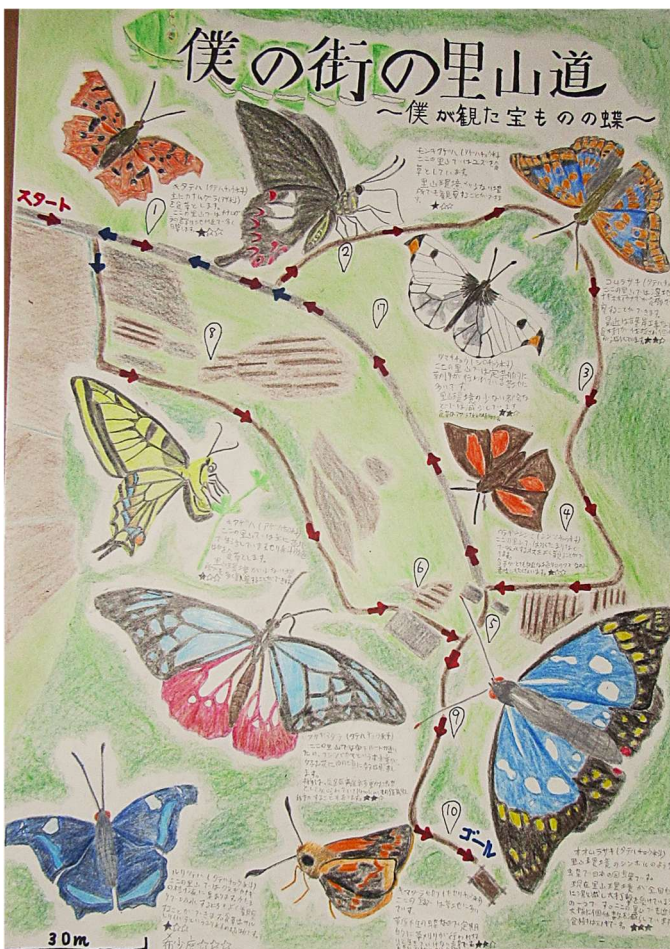
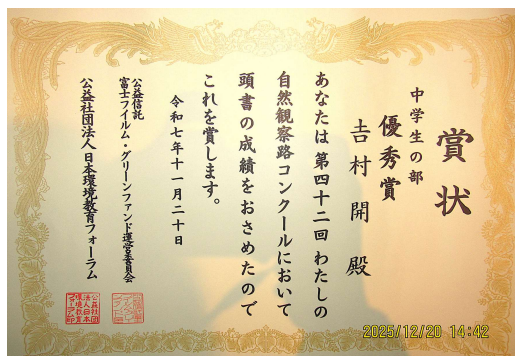
蜜源植物はタンポポなどの過酷な環境でも生育できる植物しか生えていません。蜜源植物が少ないとやはり蝶の個体数がとても少なく、乾燥が一番生息しづらい環境なのだと思います。

8は 3程の湿地帯ではありませんが、とてもジメジメしています。セリなどの、ジメジメしているが日当たりの良い場所を好む草が生えています。

湿地は人間があまり使用しない環境の一つだと思うので、このような環境も残していく必要があるのだと思いました。

9は クヌギとヤナギを数年前から植樹しているポイントです。

クヌギからは樹液がしみだしており、そこにはジャノメチョ



ウの仲間やルリタテハなどが樹液を吸っています。春はサトキマダラヒカゲ、初夏はクロヒカゲチョウが多いです。

戦前まではクヌギなどで木炭を作っていたので、そこら中にクヌギが生えていましたが、現在は少なくなっています。人間の進化は良い所もあれば悪い所もあると思いました。

10は 里山を代表する国蝶のオオムラサキの生息地です

オオムラサキはエノキという植物を食樹としています。エノキはあまり人間とは深いかかわりのある植物ではないのですが、とにかくそこら中に生えています。

ここからはオオムラサキと里山の繋がりと⑩を詳しく説明していきたいと思います

オオムラサキの成虫はクヌギ等の樹液を食料とします。人はクヌギ等を燃料として使っていました。オオムラサキは自由に飛翔できる明るい林を必要とします。人間は燃料のために木の太い枝を伐採し、下草を肥料とします。このようにオオムラサキと里山環境は切っても切れない関係なのです。

⑩はエノキが数本生えており、下草や不要な枝は定期的に伐採されていてオオムラサキが来る環境が整っていますが、オオムラサキが減少しており、里山を管理する方の高齢化もすすんでいるため若者の手が必要です。

●第6回イタセンパラの復元を目指すシンポ 12月21日 13:00~16:00 京田辺市社会福祉センター

国交省淀川河川事務所環境課や京都府自然環境課、綾先生、光田先生も出席いただき、プログラム通り進行されて16時過ぎに終了解散した。

光田実行委員長の開会挨拶のあと、前5回の振り返りとして河合先生からのご発言を読み上げて共通認識とした。続いて絶滅危惧種ヤマトサンショウウオの取組、竹エンピツの取組、オオムラサキの取組、そして里山農園での中学生の調査観察記録報告、イタセンパラと竹蛇籠設置の木津川での取組が報告され、幹部研修会として出かけた岐阜市の木曽川下流河川事務所のイタセンパラの取組報告に続いて、綾先生から淀川でのイタセンネットの取組報告後に、淀川河川事務所環境課からの現状説明がされ、その後約1時間の自由討議を行った。



置き土砂問題とその効果、泥など堆積物の撤去と課題が話題になり、現在淀川にはイタセンパラは生息が確認されていないところから、木津川漁協の外来種への対応などに話題が広がり、イタセンパラ再生復元について玉水浜のワンドへの導入水路の必要性が強調され熱い論議がされた。これまでは抽象的な課題で具体化は難しいまとめでしたが、今回は大変具体的に水路を実現するための動きが課題とされたところに大きな進展をしたシンポとなった。

またそれぞれの発言者報告者が口頭発表に加えてパワーポイントの資料が用意されていたので参加者の皆さんが集中して議論に参加されていたのではないのでしょうか。

●里山の会 2025年の十大ニュース決まる 77候補項目から選ばれました

竹蛇籠製作講習会(将棋頭竹蛇籠型水制工)

親子会花見乗船体験 (里山の会所有のゴムボート使用)

理事長 岩英夫氏就任

京都水族館との連携始まる(ヤマトサンショウウオの提供)

中学生二人、昆虫観察等で大活躍(オオムラサキ幼虫、成虫の発見等)

京田辺市文化協会の要請で「京田辺の自然を学ぶ」を話す

第3回いきものフェス(竹蛇籠製作指導で参加)

幹部研修会で岐阜県を訪れる(イタセンパラなどの研修)

同志社大サッカー部(5年連続) 集草作業を3日間支援を受ける

会誌「里山の自然」の総目録原稿完成

●12月27日 しめ縄づくり

新年を自分たちで作ったしめ縄で迎えようと計画しました。先々週のニュースで24日に実施とお伝えいたしましたが、27日の朝から行うことになりました。ご迷惑をおかけいたしますがよろしくお願いいたします 場所は京田辺市普賢寺水取(普賢寺小学校から南に800m)の里山農園教育棟で行います、参加費などは無料ですので気楽にお越しください。



●結成30周年記念の幕開け 七草摘み七草粥 前日準備 1月5日 10時

もうすぐ新年を迎えますが、来る2026年は特定非営利活動法人やましろ里山の会が結成して30周年記念の年となります。この記念の年の正月6日に農園に生えている七草を摘み取り、みんなで歌を歌って七草を刻み、七草粥を作り、青竹などで作った竹のお椀と箸で一年の無病を願って粥をいただきます。里山農園の教育棟を使いますので雨天決行ですから、こぞってお越しください。腹話術や竹とんぼ飛ばし、竹のコマまわしなどの楽しい取組を準備中です。この取り組みは食べ物を準備いたしますので参加費1人500円(会員400円)とじていますのでよろしくお願いいたします。また栽培農園で育て来た大根をお買取りいただけますのでご期待ください。

「七草摘みと七草粥」お知らせ

2026年1月6日 里山農園付近

新しい年の始まりに、そして里山の会30周年の幕開けとして、

恒例の「七草摘みと七草粥」を今年も開催いたします。

この伝統行事は、無一文から始まった里山の会の原点であり、

30年続けてきた大切な取り組みです。

七草摘みでは、冬の里山を歩きながら春の七草を探します。

七草粥は、摘んだ七草を煮て、無病息災を願いながらみんなで味わいます。

里山の会から合えるひとりに

自然の恵みと仲間とのつながりを

感じながら、楽しく農業ある

新年のスタートを切りましょう

ご家族そろってご参加ください

参加無料・申込み不要

温かい朝飯でお過ごしください。

皆様のご参加を心より

お待ちしております

30周年を迎える里山の会の歩み

竹えんびつた向かいまつりなどの自然工作

里山農園での栽培活動

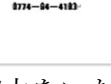
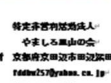
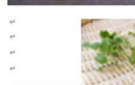
ヤマトシロウやイタセンパラの保護活動

植物園の維持と保存の理想

会誌「里山の自然」や週刊ニュースは1150号に到達

中学生の参加も増え、次世代へと活動が広がっています

生物多様性センターの活動も密接に推進中



●炭焼き体験のためのクヌギの伐採

前回クヌギだけを原木にした炭焼きを行ったところ、ヤナギなどの混合した時と比較すると大変すばらしい木炭が生産できました。この経験を活かして2026年度の炭焼き体験はクヌギで統一した取り組みといたします。そのためのクヌギは安全面や建造物に対して、これまで以上の注意が必要な切り倒し作業になりますので、ご協力をお願いいたします。場所は里山農園付近で高さ約10mで6本を予定しています。実施時期は1月中旬頃を目途に準備を進めようと思います。ご協力をいただける皆様のご都合を一番多くいただける日時にと考えております。出来ましたらメールや電話でご連絡を里山の会までお願いします。宜しくお願いいたします。

fddb257@yahoo.co.jp

0774-64-4183(f 兼)

京田辺市田辺深田 15